

平成 25 年度 いじめ対策等生徒指導推進事業

自発的・主体的な成長・発達を促す組織的取組の研究

～不登校児童生徒・不登校経験者を対象に～



お問い合わせはこちらまで



医療法人 静光園
カウンセリングルーム
フリースクール
サポート校

ソフィア

〒836-0862 福岡県大牟田市原山町 1-6 3F
TEL 0944-52-8889 FAX0944-52-8893
E-mail sophiaomuta@yahoo.co.jp
HP <http://www.sophiaomuta.com/>



医療法人 静光園
カウンセリングルーム
フリースクール
サポート校

ソフィア

はじめに

文部科学省が平成20年に告示した新しい学習指導要領の中では、「基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し、解決する力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」などの育成が重要視されている。これは、児童生徒が「自分で考え、判断し、行動できるようになる」といった自発的・主体的な成長・発達を促すことが必要であり、そのためには、「基礎的な知識・技能の習得」、「自らを律しつつ、他者と協調するコミュニケーション能力」などの育成が重要であることが示唆されているといえる。

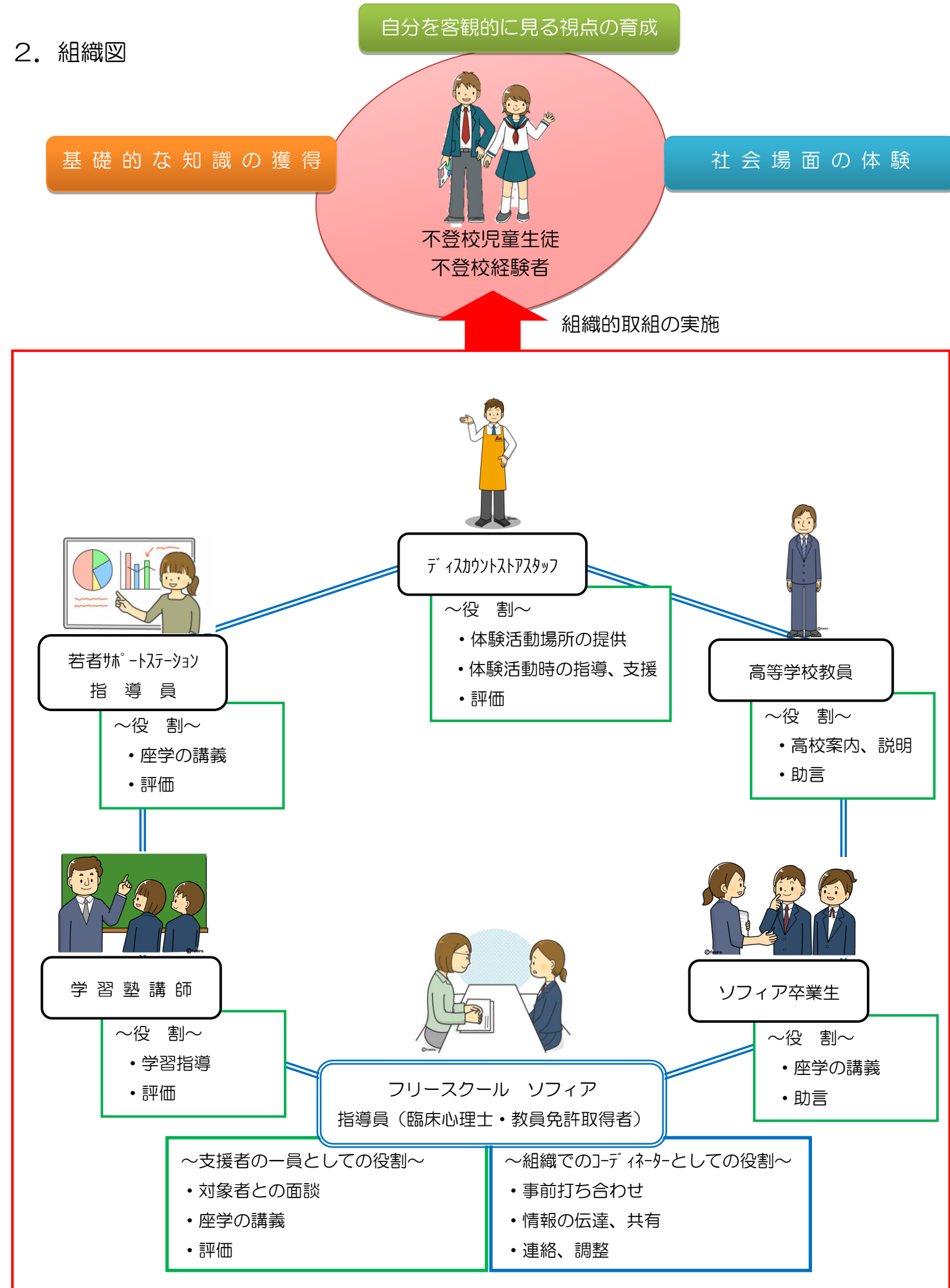
「学校支援地域本部事業」実態調査研究(平成21年)によれば、子どもたちが地域住民と交流することにより、様々な体験や経験の場が増え、学力や規範意識、コミュニケーション能力の向上につながったとの報告があった。また、ボランティア活動などの体験活動は、事前準備としてそのことについて調べたり、学んだりすることも必要とされており、そういった知識を獲得したり、実際に体験することによって、自発性・主体性が高まるという報告もある。これらのことから、自発的・主体的に取り組む姿勢の発達を促すためには、体験活動を通じた知識や経験の獲得が重要であるといえ、教育場面では体験活動を取り入れた様々な取り組みがなされている。

しかし、不登校児童生徒や不登校経験者はこうした学校での取り組みに参加できないことが多く、また、基礎的な知識や様々な体験の機会が少なくなりがちで、自発的・主体的に取り組む姿勢が発達し難い状況にある。当施設においても、限られた空間・人間関係の中ではある程度適応できるが、知識や経験が乏しく、自分を客観的に評価することが難しいため、一步を踏み出せず、社会場面ではうまく適応できない児童生徒も少なくない状況である。そのため、基礎的な知識を教えたり、体験活動をさせたりするだけでなく、自分を客観的に見る視点を養う介入も必要であることが考えられる。

1. 目的

上記の背景を踏まえ、ソフィアでは、当施設に通所している不登校児童生徒・不登校経験者を対象とし、社会生活に必要な基礎知識や社会的スキルの獲得、社会場面の体験、自分を客観的に見る視点の育成に焦点をあてた組織的取組を実施した。そして、不登校児童生徒・不登校経験者は、組織的取組により、どのようなプロセスをたどり、自発的・主体的な成長・発達が促されるのかについて検討した。

2. 組織図

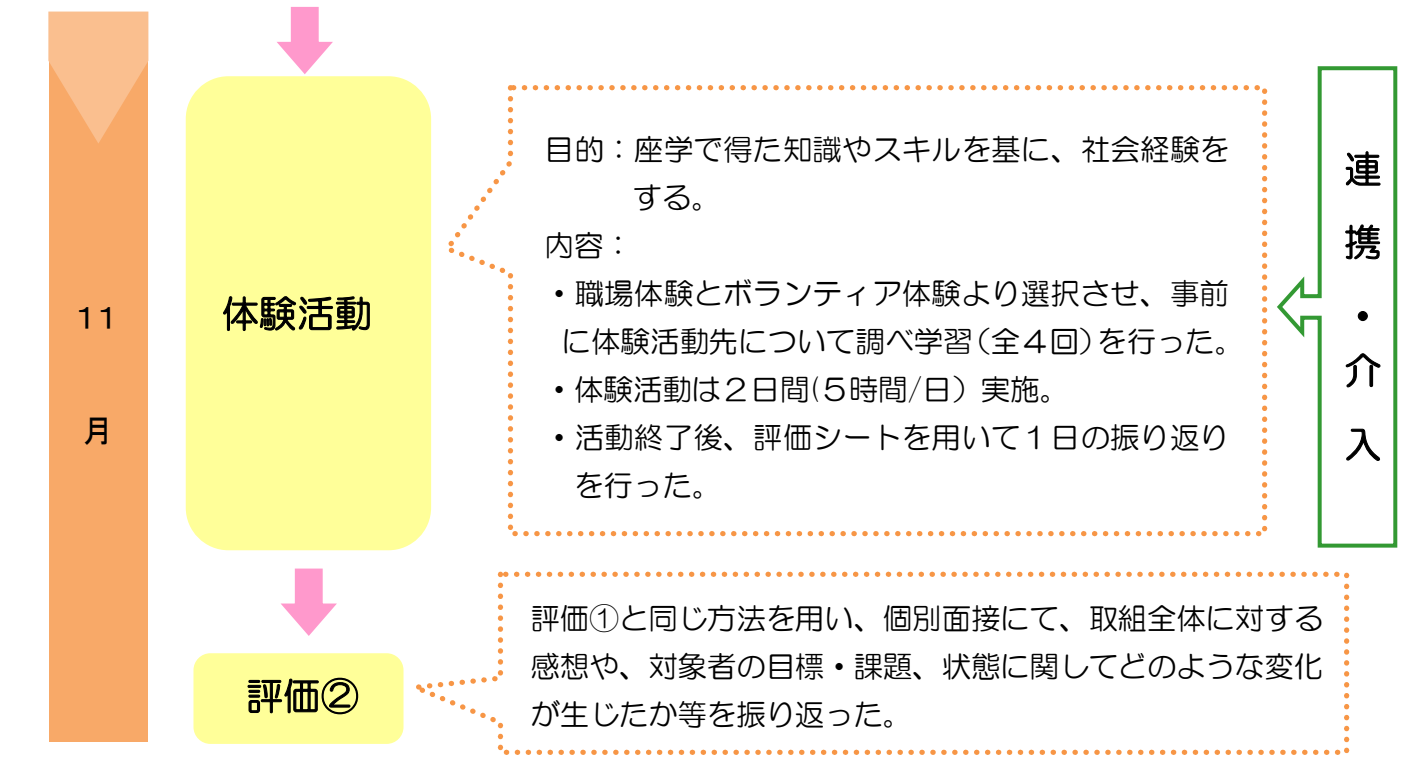
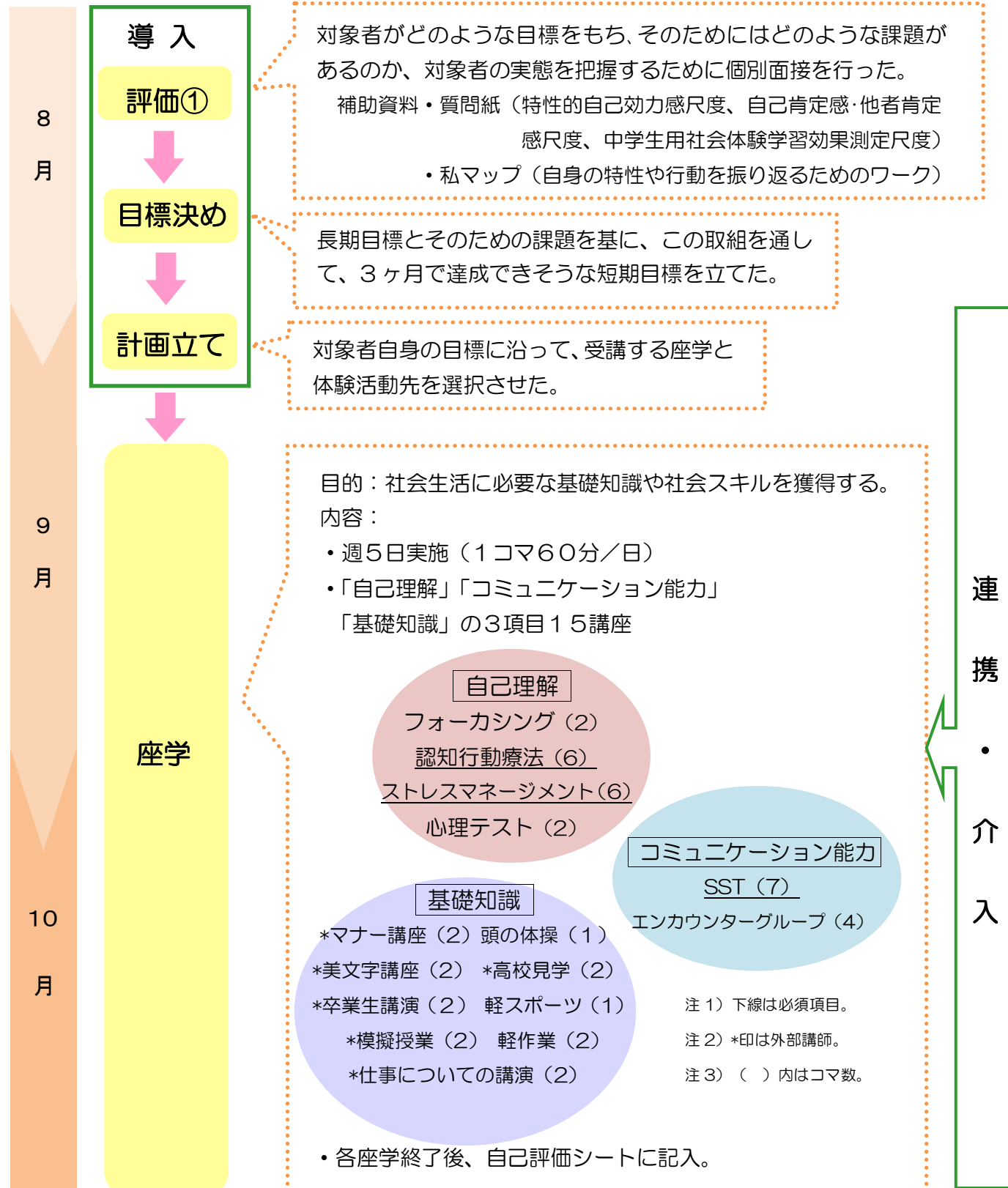


3. 組織的取組の概要

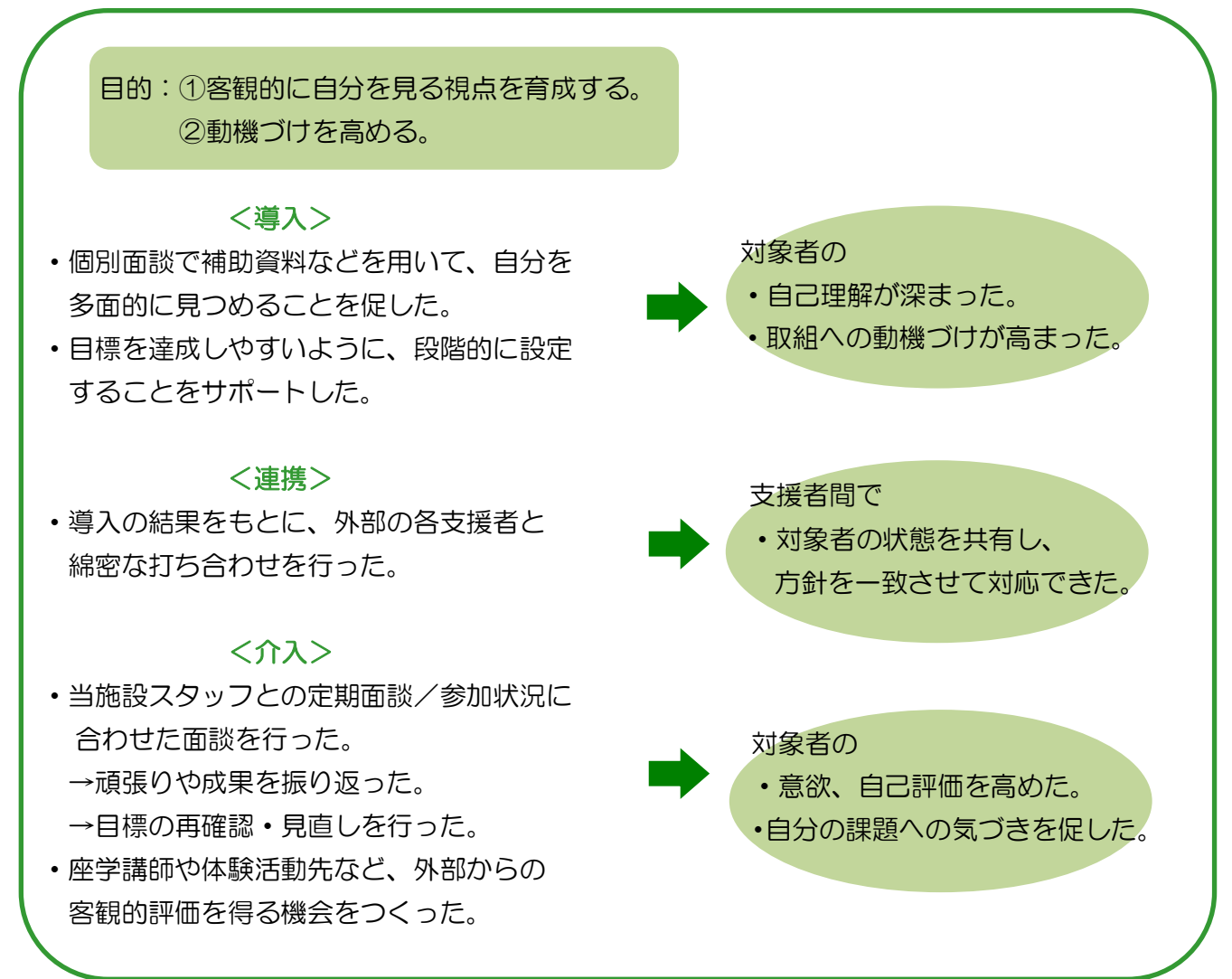


対象者：当施設に定期的に通所できているが、進学や就労等、次のステップへ移行できず、支援を必要としている利用者 4 名。
 実施期間：平成 25 年 8 月～11 月

(1) 組織的取組の流れ

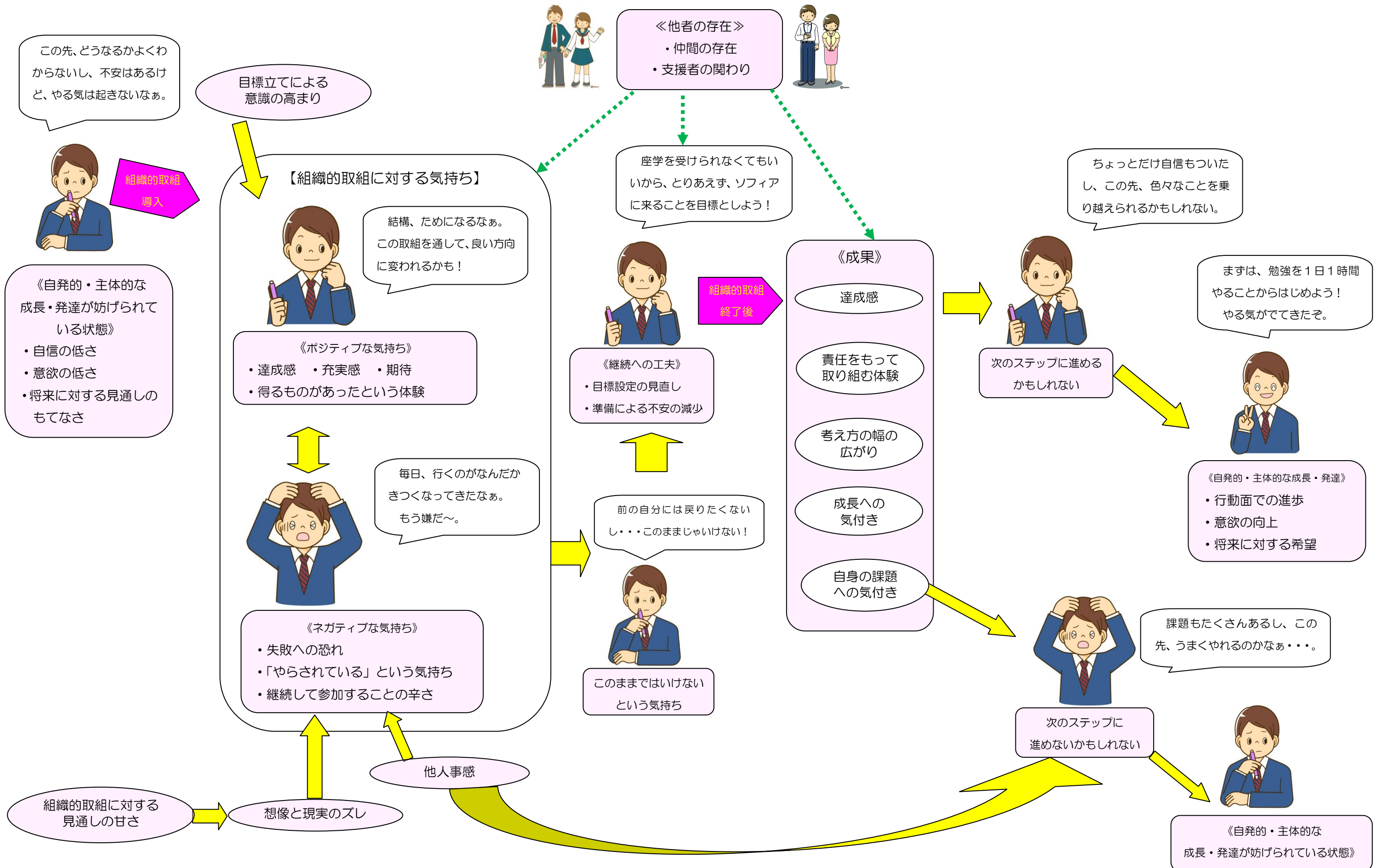


(2) 支援者のかかわり



4. 組織的取組により、不登校児童生徒・不登校経験者の自発的・主体的な成長・発達が促されるプロセス図

※組織的取組参加者4名に半構造化面接を行い、記述データを基に修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。



5. プロセスの説明

組織的取組に参加したことにより、不登校児童生徒・不登校経験者の自発的・主体的な成長・発達が進んでいくプロセスについて以下に述べる。

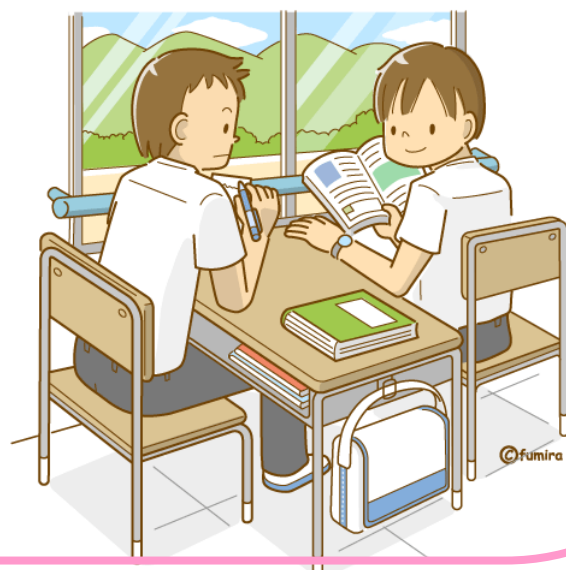
組織的取組に参加する前の不登校児童生徒・不登校経験者は、〈将来に対する見通しのもてなさ〉や〈意欲の低さ〉等、〈自発的・主体的な成長・発達が妨げられている状態〉であると考えられた。

組織的取組に対しては、〈期待〉や〈得るものがあったという体験〉など《ポジティブな気持ち》が出現するのと同様に〈「やらされている」という気持ち〉や〈継続して参加することの辛さ〉等《ネガティブな気持ち》も出現することが考えられた。

《ネガティブな気持ち》により、〈継続して参加することの辛さ〉や〈「やらされている」という気持ち〉が表面化していくが、〈「このままではいけない」という気持ち〉が出現し、〈目標設定の見直し〉をするなど《継続への工夫》を行えたことが、ドロップアウトせず、《成果》につながったと推測された。

また、組織的取組に参加した後は、〈考え方の幅の広がり〉や〈自身の課題への気付き〉が促されるなどの《成果》がみられた。このような《成果》により、〈次のステップに進めるかもしれないという気持ち〉が出現したと推測された。〈次のステップに進めるかもしれないという気持ち〉が出現することにより、〈行動面での進歩〉や〈意欲の向上〉など、《自発的・主体的な成長・発達》が促されたと考えられた。しかし、一方では、〈自身の課題への気付き〉により、その課題の大きさから〈次のステップに進めないかもしれないという気持ち〉が出現する可能性も考えられた。

以上のようなプロセスをたどり、不登校児童生徒・不登校経験者の自発的・主体的な成長・発達が促されていくと考えられた。



6. 組織的取組を実施する際のポイント

Point 1. 組織的取組に対してネガティブな気持ちが出現する理由。

組織的取組に参加すると決めた時には、自分の現状や能力を把握しきれておらず、「自分は、最後まできちんと参加することができるだろう」といった見通しの甘さがあると考えられる。そのため、実際に組織的取組を開始すると、想像していた以上のきつさや辛さを感じるようになり、「自分は思った以上にできない」といった現実と直面する。このような想像と現実のギャップにより、ネガティブな気持ちが出現すると考えられた。



組織的取組を通して、こういったネガティブな気持ちが出てくるのは、当然です。支援者は、焦らずに、生徒のきつさや辛さなどを共感・理解しながら関わっていきましょう。

Point 2. ドロップアウトしないためには・・・

組織的取組を最後まで継続して参加することが、自発的・主体的な成長・発達には必要である。しかし、組織的取組に参加中は、参加し続けることへの辛さや「やらされている」感など、ネガティブな気持ちも出現する。ネガティブな気持ちが強くなってくると、欠席が増えるなど、目標への行動が妨げられる場合がみられる。そういった「もう嫌だ、やりたくない」とネガティブな気持ちの一方で、「でも、自分のためになってるし、続けたら、何かが変わるかもしれない」といったポジティブな気持ちも存在するため、継続した参加が可能となることが推測された。



支援者は、ポジティブな気持ちをより感じられるように、出来ている部分のフィードバックをしたり、生徒のレベルにあわせて座学内容の工夫を行ったりしていくことが、ドロップアウトを防止するためには必要でしょう。評価シートの活用など目に見える形でフィードバックをしてあげるとより効果的です。

Point3. 他人事感が強いと成果が得られにくい。

自分のためにしていることであるにも関わらず、組織的取組に参加中、「自分は困らないし、休んでもいいや」といった<他人事感>が出現してくる場合がある。この<他人事感>は、組織的取組に対するネガティブな気持ちに繋がりがやすく、<他人事感>を抱えたまま、組織的取組に参加し続けると、組織的取組をやり遂げても、成果を感じることができず、<次のステップに進めないかもしれない>という気持ちに繋がりがやすくなることが考えられた。



他人事感が出現してくる背景として、組織的取組と自分の目標をうまく関連付けて考えられず、組織的取組にメリットが感じられなかったり、自身と向き合うことへの回避的な気持ちになったりと、様々な要因が考えられます。支援者は、他人事感の出現を見落とさないように、生徒の発言や言動に注意して関わっていきましょう。

Point4. 自身の課題への気付きは、プラスにもマイナスにも働く。

組織的取組を通して、具体的にクリアしていくべき自身の課題に気付くことにより、<次のステップに進めるかもしれない>という気持ちにつながることもある。しかし、自身の課題が大きく、対処できないと感じた場合は、<次のステップに進めないかもしれない>という気持ちに繋がってしまうことが考えられた。



自身の課題に気付いても、課題が大きすぎると、次のステップへの行動が難しくなります。生徒が、課題に対して解決できるまでの見通しを持ち、対処できると感じる事が大切です。そのため、支援者は、生徒と課題を共有し、段階的な目標作りをしていきましょう。

Point5. 仲間の存在の役割。

組織的取組を通して、仲間の存在は、「友だちも頑張っているから、自分も頑張ろう」といった継続するための励みや刺激になったと考えられる。このことから、共に努力をする仲間の存在は、組織的取組を継続する上で重要な役割を果たしているといえる。しかし、一方では、休みがちになったり、不安を口にしたりなど、仲間のネガティブな言動が、意欲の低下に繋がれることもある。



支援者は、ネガティブな言動をしている生徒だけではなく、周囲の生徒への影響も考慮して関わりましょう。

7. 今後の課題

組織的取組を終えた直後は、意欲が高まったり、行動面での進歩がみられたりと、自発的・主体的な成長・発達が促されたことが確認された。しかし、しばらく時間が経つと、意欲が低下したり、行動面も組織的取組前の状態に戻ってしまったりと、自発性・主体性は弱まることうかがわれた。自発性・主体性を持続させるためには、継続した支援者の関わりが必要であると考えられた。

